

摘発する喜びを犬とともに分かち合う ～麻薬探知犬業務のエキスパートに聞く～

麻薬等の匂いを嗅ぎ分け、不正薬物の我が国への密輸入を水際で阻止する麻薬探知犬は、摘発に欠かせない存在です。そんな麻薬探知犬の育成や、犬を操るハンドラーの仕事も税関の重要な仕事の一つです。

今月号では、麻薬探知犬の育成・訓練を一括して行う麻薬探知犬訓練センターで、育成インストラクターとして働いている小副川 幸雄さんにお話を伺いました。

月報編集部

犬と心を通わせ、摘発を目指す

——これまでに経験した麻薬探知犬に関する仕事について教えてください。

これまで麻薬探知犬ハンドラー（ハンドラー）と育成インストラクター（インストラクター）の業務を経験してきました。

まずハンドラーについてですが、ハンドラーと麻薬探知犬がペアとなり、成田空港や羽田空港での手荷物の探知業務、ならびに国際郵便局での国際郵便物の探知業務などを行う仕事です。麻薬探知犬は、主に旅客の機内預託手荷物、貨物、郵便物を検査する貨物検査対応犬と、主に入国検査場内の旅客や手荷物を検査する旅具検査対応犬の二種類に分かれ、私は両方のハンドラーを経験しています。

現職でもあるインストラクターは、麻薬探知犬を育成することが主な仕事となります。麻薬探知犬の育成は、公募によつて集まった候補犬を約四か月の期間をかけて訓練し、麻薬探知犬に育て上げます。この訓練には、新人のハンドラーも研修生として参加しますので、その指導、育成も兼ねることになります。なお、育成訓練は春と秋の年二回行っています。私はこれまで、一〇年以上という長い期間麻薬探知犬業務を

経験しています。

——貨物検査対応犬と旅具検査対応犬では、検査場所以外で違いはありますか。

根本的な違いとしては、貨物検査対応犬の検査場所には人がいないので、人の匂いを嗅ぐこともなく、比較的本能のままに検査ができますが、旅具検査対応犬の場合は入国検査場内が検査場所のため、事故につながるおそれがあるので走り回ることができず、人に制御されながら検査することになります。

ハンドラーの側から見ると、貨物検査対応犬の場合はベルトコンベアに沿って荷物の匂いを嗅ぐといったように麻薬探知犬をコントロールすれば良いのですが、旅具検査対応犬の場合、人の動きは規則的ではありませんので、どうすれば複数の人を効率的に検査することができのかわかるとハンドラーが瞬時に判断し、麻薬探知犬をコントロールしなければなりません。

——麻薬探知犬に関する仕事を希望していたのでしょうか。

実は希望してこの仕事に携わったわけではないのですが、初めてハンドラーの仕事をした時の出来事がきっかけでこの仕事の魅力にとりつかれてしまいました。ハンドラー一年目は、非常に優秀な麻薬探知犬を

担当したこともあり順調に仕事ができ、大量の不正薬物の摘発はなくとも、少量を発見する回数が一番多かったので、私が優秀なわけではないにもかかわらず、ちよっと有頂天になっていました。二年目に入る頃、定期的に麻薬等の匂いを嗅がせるなど、麻薬探知犬の能力を維持するための訓練をしつかり行うことができなかったという私の未熟さが現れ、あれほど優秀だった麻薬探知犬が検査を棄しそうにしなくなり、私が匂いを嗅ぐよう指示をしても従わないなど、私の状態となっていました。毎日麻薬探知犬と接していると、麻薬探知犬が少しずつ変化していつていることには気付かないもので、当時の私はどん底の状態になっていることさえも自覚することができず、この状況を見た上司から、こんな状態で満足しているのかと指摘されて初めて気付きま



小副川 幸雄さんと候補犬

ります。チーム内のハンドラーは、不正薬物の探知を見逃さないようにするため、他のハンドラーの探知状況等を確認し、気付いたことについてお互いに言って確認し合うようにしていますので、先輩後輩なく言い合える雰囲気が大切だと思います。また、探知業務の現場においては、輸出貨物の検査を担当している部門（検査部門）の職員や旅客の検査を担当している部門（旅具通関部門）の職員とも連携して探知業務に当たりますので、チームワークが非常に重要になっています。ハンドラーも含め、他部門の職員も「不正薬物の水際阻止」という共通の使命感を持っており、現在の職場は非常に士気が高く、税関の中でも熱い職場ではないかと思っています。

「教える」ために絶対的な信頼関係を築く

——インストラクターの業務は「教えること」が中心となりますが、人に教える上で留意していることなどを教えてください。現在の職場は、麻薬探知犬に関する仕事を一から教える場ですので、自分の力でパートナーとなる麻薬探知犬を一から育て、一緒に仕事をして摘発する経験ができ

した。私がなかなか大量の不正薬物を摘発することができない中、同期や先輩は着々と摘発していったので、本当にまずいなと落ち込んでいたと、その上司は「今はどん底だから、あとは上がっていくしかない」と言ってくれて、そこで訓練の大切さや、犬の気持ちがいかに大切なんだということに改めて教えられました。その後、上司とともに訓練を続け、能力が回復したところ、三か月目ぐらいにやっと大量の不正薬物を摘発することができました。どん底の状態からいろいろな訓練を試みて麻薬探知犬が良い状態に戻り、摘発という結果を出すことができたという経験を、この仕事は本当に面白いなと感じてとりつかれてしまいました。私の場合のように、答えが見えた時はいいのですが、私たちの仕事は、どんなに経験を積んでも答えが見えない時があります。答えがないというものは、仕事の醍醐味で、常に考えさせられることが面白いですし、そこで何かを発見できた時はもっと面白いです。

——業務を行う上で、会話できない麻薬探知犬との連携が不可欠だと思うのですが、どのように信頼関係を構築するのでしょうか。

ハンドラーの場合、使役犬である麻薬探

る楽しみを常に伝えられるように考えています。毎日犬と触れ合い、わくわくドキドキしながらいろいろな訓練に取り組んで、どういいう訓練が犬に合うかを考えて、犬の気持ちを理解しながらやっていくことがこの仕事の魅力でもあり難しいところだと思います。

また、自分ができることを研修生には言わないということも心掛けています。受け持っている研修生が、私のことを口先だけじゃないかと思ってしまうと信頼が大きく揺らぎますし、自分ができることが少ないと、研修生にも低いレベルのことしか教えられませんか、どんなに難しいことで



候補犬を訓練する様子

知犬との関係で大切なのは主従関係だと思います。ハンドラーから出される命令目をキラキラさせて従う、褒めると尾を激しく振って喜ぶ、叱るとシユンとするなどの関係が理想だと思っていますが、これには毎日の積み重ねが必要で、私が心掛けていることは探知業務以外の触れ合いです。犬と接する時間が長ければ長いほど、目を見れば考えが何となく分かるようになりますし、真剣に犬と向き合えば、同じ動物でするので通じるようになります。『おはよう』、『今日も頑張ったな』など、言葉の意味は分からなくても、犬は人の表情や声色でちゃんと感じるができます。そのような他愛のない会話をすることで『自分を見てくれてる』、『この人がいるなら安心できる』と信頼してくれるようになると思っています。もちろん、ある程度の知識や技術は必要ですが、一番大切なのは愛情だと思っています。

——ハンドラーは、麻薬探知犬とともに単独で業務を行うのでしょうか。

ハンドラーと麻薬探知犬は、単独で探知業務を行うことはありません。二、三名のハンドラーとそれぞれが担当する麻薬探知犬の他に探知業務の際の補助に当たる職員を加えたチームを編成して探知業務に当た

も自分のできた上で言うようにしています。教えるというのは非常に難しいことですが、自分自身ができるからこそ人に教えることができ、信頼関係も築くことができると信じていますので、研修生と会って早い時点で「とにかく自分を信じて辛い時も食らいついてきてほしい。そうしたら絶対に良い麻薬探知犬が育てられる」と言うようにしています。強い信頼関係があれば、たとえ訓練で嫌なことがあっても乗り越えられると思います。こうした信頼関係を築くためにも、自分は絶対に仕事では手を抜いてはダメだと肝に銘じていますし、後輩のインストラクターにもそう教えています。

——自分を信用すれば絶対に上手くいくと言いつけるってすごいですね。

税関の麻薬探知犬はこの訓練センターでしか育成されませんので、全国の税関から来る研修生は、良い麻薬探知犬を育成してきてくれという税関の期待を一身に受けて訓練に参加しますので、ものすごいプレッシャーがかかっています。それを和らげるためには自分にもプレッシャーをかけるようにしないと、いい麻薬探知犬も人材も育てることはできないと思います。研修生には、そういったプレッシャーを受けつつ、わくわくドキドキしながら、最終的には麻

薬探知犬を育てることは厳しかったけど楽しかったという思いを少しでも分かってもらえればいいのかと思います。

正直に言うと、私も人間ですし、完璧ではありませんので自信がない時もあるけれど、訓練をしていて迷う時もあります。でも、迷っている姿を研修生に見せると研修生は余計迷ってしまう、麻薬探知犬もそれを見てどんどん悪い方向にいつてしまいますので、迷っているところは絶対に見せないようにしています。難しいのですが、迷っている時は切り替えさせることが非常に大切で、まずは人を切り替えさせるために、いろいろ試行錯誤しながらどうしたらいいかを導き出すようにしています。

考えて試行錯誤し、どこにも載っていない答えを探し出す喜び

——これまでの仕事で苦労したことはありませんか。

ハンドラー時代に、初めて自分で育てた麻薬探知犬が現場に出るすぐにクビになりかけた時には苦労しました。旅具検査対応犬のキング号という麻薬探知犬だったので、最初は非常に調子も良く意欲的に検査をしていました。しかし、二か月ほど経つ

たある日、検査中に伏せ込んで（腹ばいになり、動かなくなる状態）しまいました。

私はその原因を、旅客との間で何か嫌なことがあったのかなと思って、麻薬探知犬に「よしよし」と声をかけて安心させながらその場を去ったのですが、その日以降、検査場内をあらさまに嫌がるそぶりを見せるようになり、日を増すごとに検査場内で伏せ込む回数も増えていきました。上司もこれを見ていて、このままでは麻薬探知犬として働くことは困難であるため、一か月の能力回復訓練を行い、もし回復しないようであれば認定解除（麻薬探知犬の認定を取り消す）も視野にいれるとの判断が下りました。

そこから上司と二人で、伏せ込んでしまう原因を究明するために、初歩訓練から開始することになりましたが、なかなか原因が判明できませんでした。二週間が過ぎた頃、麻薬探知犬との信頼関係を構築するために歩行訓練を行った際に、伏せ込んだ瞬間に目が合っていることにふと気付き、その後、意図的に目を合わせるとやはり麻薬探知犬が伏せたのです。その瞬間、旅客に対する怯えだと考えていた伏せ込みの原因は、実はハンドラーに対する甘えだとビビッと感じました。麻薬探知犬が初めて伏

せた時に、私が基本通りに「よしよし」と言って安心させてその場から引き離れたことで、嫌なことがあったら伏せれば優しくしてくれるだけでなく、触れ合ってもくれると学習し、検査をするより伏せた方が楽しいと思っただけではと私は推測しました。

原因判明後、すぐに能力回復訓練を開始しました。訓練の序盤では、キング号と目を合わせないようフォローしながら基本的な訓練を繰り返し繰り返し行いました。そうすると次第に伏せ込む回数が減っていき、一か月後には無事に現場復帰することになりました。復帰して二週間後には、キング号にとって初めての摘発をすることができました。

考えて考えていろいろな試してみても、やると答えを見つけたらという経験は私にとって大きな自信となりましたし、些細なことに対して、ハンドラーが大げさに扱ってしまうことで、こうした事態に陥ってしまうという経験は自分の引き出しとして蓄積されています。

——麻薬探知犬に関する仕事の醍醐味を教えてください。

麻薬探知犬とともに不正薬物の摘発ができることです。税関には多くの部署がありますが、パートナーである麻薬探知犬とともに伝承されるという、いかなければ職人技の継承という形で受け継がれていきますので、摘発できる麻薬探知犬の育成と、摘発できるハンドラーを育てることは常に変わらぬ目標です。そのためには、自分自身が理想とする、若しくは「そうになりたい」という職員像である「自分がこれまで培ってきたノウハウを正しく、そして分かりやすく後輩や研修生に伝え、指導し、常にやる気を持たせることのできる職員」でありたいと考えています。そして、日本には優秀な麻薬探知犬がいるということが世界中に知れ渡って、密輸の減少につながることであれば、それが理想なのかなと思っています。

——大量の不正薬物を初めて摘発した時はどんな気持ちでしたか。

私は郵便物の中から見つけたのですが、今でもその時の状況を鮮明に覚えています。かごに入っている郵便物が三段積みになっただけで、それが一〇列ぐらい並んでいる状況で、通常ですと一列目から順番に検査していくのですが、その時は、麻薬探知犬が何かを感じた気配でいきなり五列目まで進んでいったんです。おそらく一年目の自分だったら麻薬探知犬の動きをあまり見ず、一列目からしつかり検査するよう麻薬探知犬を無理矢理戻したと思うのですが、

その時は麻薬探知犬の鼻使いから、麻薬探知犬が何かに気付いて一生懸命探していることが分かったたのでそのまま匂いを追わせるところ、三段目にある麻薬を発見することができました。先ほどお話ししたとおり、私は初めて大量の不正薬物を摘発するまでの期間が一年三か月と長く、苦労があった上での摘発でしたので「やっとやったぞ」という、うれしい気持ちでいっぱいになりました。上司に摘発を報告すると、普段は厳しいのに、まるで自分のことのように喜んでくれて、改めてチームで仕事をしているんだということが実感できました。

麻薬探知犬をうまく扱えないハンドラーでも、摘発ができる仕事の魅力を感じ、麻薬探知犬との接し方や仕事を覚えて、飛躍的に伸びていろいろなことを考え出したりますので、やはり摘発することがこの仕事の醍醐味であり、最も大切なことだと思います。

密輸の減少につながる技術を伝承する

——今後の目標や理想はありますか。

麻薬探知犬を扱う技術は、先輩から後輩へ、インストラクターから研修生へ技術が



過去に活躍した麻薬探知犬たち
(麻薬探知犬訓練センターにて)